ニッポン ドクター和の 臨終図巻

㉗④ 俳優 渡部又兵衛

糖尿病で足を失い愛を得た

数年前、脳科学者の茂木健一郎さんがSNSで「権力を批判しない日本のお笑い芸人は終わっている」という旨の発言をし物議を醸していました。なぜこの発言で炎上したのかよくわかりませんが、日本には〈ザ・ニュースペーパー〉がいるじゃないか、と僕は独り言ちました。

時の権力を批判する芸人は、日本にもきっと数多いるでしょう。でもテレビはそういう人を出したがらない。これは、芸人を医者に置き換えても同じことが言えます。僕もその一人です。

社会風刺コント集団〈ザ・ニュースペーパー〉の創設者で、福田康夫氏や鈴木宗男氏や中曽根康弘氏、福島瑞穂氏などの政治家モノマネでも人気を博した俳優の渡部又兵衛さんが、9月7日、都内の病院で亡くなりました。享年72。死因は、糖尿病による敗血症との発表です。

渡部さんは、2006年に『お笑い芸人 糖尿病と二人連れ』（グラフ社）という本を出版しています。本書によれば、40歳の若さで糖尿病と診断。しかし、自覚症状もなかったことから、しばらく病院から足が遠のいていたそう。数年後、足のむくみが酷くなり再び病院へ。

その後の渡部さんに、糖尿病合併症が次々と襲い掛かります。

まずは両目の白内障の手術。糖尿病になると、ソルビトールという特殊な糖が水晶体に蓄積することで視力の低下をもたらすのです。

そして、ストーブの熱に気づかず足を火傷。高血糖による神経障害を起こしていたため、痛みに気がつかず放置。その部位から壊疽（えそ）を起こして、左足切断を余儀なくされます。

足の切断は、糖尿病の合併症としてはもっとも避けたいリスクですが、我が国では年間3000人が、切断手術を余儀なくされているのが現実です。切断後の予後は一般的に非常に悪く、術後平均生存期間は約400日。5年生存率は20～30％です。

しかし、片足を奪われても、表現者の情熱は奪われませんでした。週3回の人工透析を続けながら渡部さんは、2007年に糖尿病をテーマにした舞台を披露し、多くの患者さんを励ましたといいます。

僕が一番驚いたのは、先の闘病記を読んだ昔の恋人から連絡があり、その人と62歳で結婚をされたという話です。「足を失ったことより彼女を失ったことの方が悲しい」と本に書いてあったことが、彼女の心を動かしたそう。辛い合併症と闘いながら、平均余命を遥かに乗り越え活躍できたのは、舞台魂と奥様の献身の賜物でしょう。見事な闘病、見事な愛です。

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。